

2023年11月の選評に代えて 高橋修宏

ミシン目を切り取る音が冬になる (音無早矢 埼玉県)

とても繊細な聴覚上の変化が、「冬」を引きよせる一句。感覚的な把握でありながら、たしかな実感も伴う。

自転車を立ち漕ぎして行く (スズキセーホン 千葉県)
美少女の黒髪流れ天の橋立

ラストの「天の橋立」への飛躍には驚かされた。もしやすると、「美少女」の遠景に「天の橋立」が重なって見えたのかもしれないが、「美少女の黒髪流れ」そのまま「天の橋立」になったと読むほうが、この作品にふさわしい。まさに、日常の光景にひそむシュルレアリアルな怪作か！

冬の霧<個人>と光るタクシー灯 (田崎森太 東京都)

普段、目にしている当たり前の光景の中の発見か。むろん、それは〈個人〉の経営ということだが、異邦の眼差しで捉えたとき〈個人〉は不思議な灯りとなるのかもしれない。

やさしくなるために (im 沖縄県)
あなたをたべている

「たべる」という比喩は、通俗的なものを含め様々に用いられてきた。この作では、「やさしくなるために」と記され、倒錯した窮極の愛の表現であるのだろうか。

朝
画家は
庭の木すべての葉に
白の
色鉛筆の光をのせて

「庭木」をはじめ外界にある風景は、たえず時と共に変化しつづけている。この作では画布やスケッチブックを省略することで、「画家」が直接「庭木すべての葉」に「白」という色をのせているような屈折が生まれている。窮極の風景画を求める画家を主人公とした『マルメロの陽光』（ビクトル・エリセ監督）という映像作品を思い起こした。

春めいて
この街ももう終わりだね

「この街」が終わりである理由は、それ以上明示されていない。ただ、「春めいて」と記されているだけだ。「春」という季節の深層にひそむ、退廃の予感や気配まで想起させる不思議な作品。

唇が地球を爆破するための
スイッチだったらキスはさすがに

隔たりのある二つの異なった事象を、強引に接続させることによって成功した作品。「キス」という身体的な愛情表現が、同時に地球を「爆発」させるスイッチであるとは驚かされた。ナンセンスでアナーキーな佳作。

爆発の中ほどまでお進みください
君が始めた戦いだろう

何より、「君」に対する痛烈な呼びかけが印象的だ。「君」と呼ばれることで、「戦い」を始めた主体が決して抽象的な存在ではなく、ひとりの人間であることを鮮明にする。アイロニカルな非戦の表現と言えるのではなかろうか。

真夜中に雪降る街は海の底
クジラの声に耳を澄ませて

(花野木春 東京都)

一行目の「雪降る街」をめぐるメタファーが、そのまま「クジラの声」を呼び出していく。真夜中ゆえか、視覚的なクジラの映像ではなく、「声」としたことで聴覚的なリアリティが生まれた。

行儀よく留守番してるりんご飴

(中村航太 福岡県)

擬人化と呼ぶ手法のひとつだが、ときには人以上に〈モノ〉が生きいきと存在感を見せることもある。どこか懐しく、あどけないイメージの「りんご飴」は、人以上に「行儀よく」留守番するのにふさわしい〈モノ〉なのかもしれない。

回送のバスの速さを見て少し
わらって帰る空気になった

(藤井柊太 神奈川県)

一見、関係のないような事象でも、人の感情や気分には作用することがあるのだろう。作者は、乗客を降ろして帰る「回送のバス」の速さを見て、「わらって帰る空気になった」と記す。なにか、一仕事を終えたような軽やかな気分が漂う。

雨、とだけ返信が来て
胸底の

(ひろみ 京都府)

小さな街に雨が降りだす

とてもナイーブで、静謐な気配をたたえた作品。だれからの「返信」か気になるが、二行目の「胸底の」が折り返し点となって、「雨」が作中主体の内面の景の比喩となってゆく。句点や改行にも巧みさを感じる。